# 諏訪・安曇野殺人ルート

西村京太郎

諏訪(すわ)・安曇野(あずみの)殺人(さつじん)ルート
西村京太郎(にしむらきょうたろう)
© Kyotaro Nishimura 1997

1997年2月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義
製版——凸版印刷株式会社
印刷——凸版印刷株式会社
製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-263450-3

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

江苏工业学院图书馆
藏书章

講談社文庫

# 謀訪・安曇野殺人ルート

西村京太郎

講談社

目次

第一章　帰郷……5
第二章　ホステス……41
第三章　不安……77
第四章　ある男の正体……113
第五章　安曇野……147
第六章　振込先……181
第七章　動き出す……215
第八章　最後の闘い……249
解説……板垣亮平……285

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

# 第一章　帰郷

## 1

諏訪湖の周辺に、バブル全盛の頃、競うように、いくつものリゾートマンションが、建てられた。

どれも、洒落た造りで、湖に、よく映えている。だが、夜になると、明りの点く部屋は少い。バブルがはじけて、売れ行き不振なのだ。

マンションの持主である不動産会社の中にも、分譲を諦めて、賃貸するところも、出てきた。

「レイクサイド・諏訪」も、その一つである。

このリゾートマンションの七階に、去年の十一月から、一人の男が、部屋を借りて、住むようになった。

年齢は、五十五、六歳である。小柄だが、中年にしては、しなやかな身体つきで、精悍な

感じがした。
家族はいないらしい。708号室のドアの横に、「山下俊」という表札を取りつけた。
管理人の石野は、その表札を見た時、首をかしげた。確か、賃貸契約書にあった名前は、違っていたからである。
石野が、ある時、それをいうと、男は、笑った。
「私は、小説を書いていましてね。山下俊というのは、ペンネームなんですよ。実名より、こちらで呼ばれることが多いし、手紙なんかも、山下俊で来ますのでね」
と、いい、新しく作った名刺をくれた。
それにも、山下俊の名前と、このマンションの住所が、刷ってあった。
山下は、そのあと、近くの諏訪信用金庫に、山下俊名義の口座を作り、キャッシュカードも、作った。石野が、ひそかに、信用金庫の人間に聞いたところでは、一千万円を、預けたという。
石野夫婦には、娘が一人いる。名前は、美加子で、現在、松本にある大学の国文科の三年だった。
冬休みに、帰って来たその美加子に、石野は、
「山下俊という作家を、知っているかい？」
と、きいてみた。

「ヤマシタ、シュン？　どんな小説を書いてる人？」
美加子は、みかんをむきながら、きき返した。
「知らないよ。書いた本を見てないんだから」
「それじゃあ、わからないわ」
「しかし、お前は、作家志望なんだろう？」
「そうだけど、有名無名を全部入れると、五万人はいるといわれるのよ。大部分は、無名だったり、作家志望だったりするんだけど。その人がどうしたの？」
「うちの708号に、十一月から、住んでるんだ」
「へえー。若い人？」
「いや、中年の男だよ」
「いつも、何をしてるの？」
「さあね。暖かい日は、湖のまわりを散歩したりしてるよ。金には、困っていないらしい」
「ふーん」
と、美加子は、鼻を鳴らしたが、山下俊という人間に、少なからず、関心を、持ったらしかった。
諏訪の町は、周囲を山に囲まれている。そのため、その山々に雪は降っても、町には、ほとんど、雪は降らない。

湖は、冬は凍結し、湖の真ん中がそのため、盛りあがるのを、御神渡といって、諏訪大社の神が、歩いてわたるといわれるのだが、今年は、暖冬の影響か、湖は、凍結しなかった。

その原因を、湖が汚染されたせいだという人もいるのは、戦後、埋め立てが続いて、ヘドロが生じたりしたせいだろう。町や、県も、ようやく、湖の浄化に立ち上り、下水道の整備に力を入れ始めている。

正月三ガ日も、この地方にしては、暖かだった。

美加子が、その暖かさに誘われて、湖岸に設けられた遊歩道を、間欠泉センターに向って歩いていると、備付けのベンチに、腰を下している小柄な男が、眼に入った。

男は、じっと湖面を見つめている。

美加子は、男の近くに腰を下して、

「山下俊さんでしょう？」

と、声をかけた。

男は、ゆっくり、顔を向けて、

「君は？」

「石野美加子です」

「石野？　管理人さんが、確か、石野さんという名前だったが」

「その娘ですわ」

「ああ、大学へ行っているという？」
「ええ。冬休みで、松本から帰っているんです」
「そうか。今は、冬休みか」
「山下さんは、小説を書いていらっしゃるんですって？」
と、いって、美加子は、じっと、山下の横顔を見た。まだ、半信半疑だったからだ。
山下は、微笑して、
「売れない作家でねえ。この諏訪湖を舞台にした作品を書きたいと、思っているんだがね」
「前は、何処に住んでいたんですか？」
「実は、この近くの生れでね。小学生の頃、おやじの仕事の関係で、東京に移って、そのあとは、ずっと、東京で暮してきた。今度、急に、故郷に帰りたくなってね。いざ帰りなんということだよ」
「帰りなんいざ。田園まさに蕪れなんとすだったかしら？」
「よく知っているね」
と、山下は、笑った。
「何十年かぶりに帰った故郷は、荒れてました？」
と、美加子は、きいた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

## 2

山下は、穏やかな顔で、
「私の子供の頃は、湖はもっと大きかったし、夏になると、よく泳いだものだよ。それだけ、きれいだったんだ」
「最近、少しずつ、きれいになってるの。白鳥も来るし――」
美加子は、自然に、諏訪を弁護する調子になっていた。
「君は、いい人なんだな」
と、山下は、いった。その顔が、微笑していた。
美加子は、そんないい方に、なぜか、反撥して、
「どっちかというと、私は、この町も、湖もあまり好きじゃないの」
と、いった。
「なぜかな？」
「景色はいいけど、退屈だわ。大学を卒業したら、東京に行くつもりでいるの」
「東京は、退屈じゃないからかね？」
「ええ」

「東京に住んだことは？」
「ないけど、遊びに行ったことは、何回もあるわ」
「若い時は、いいかも知れないね。刺戟を受けるのも」
「私ね、退屈だったら、死んじゃうわ」
「死ぬというのは、ただごとじゃないね」
と、山下は、笑ってから、
「私と話してるのは、退屈じゃないのかね？」
「どんな過去を持ってるのかなって考えると、退屈じゃないわ」
と、美加子は、いった。
「私の過去？」
「ええ。長い間、生活してきた東京を、突然、捨てて、諏訪に戻ってくるなんて、何かあるに決ってるわ。よほどのことがね」
「どんなことがかね？」
と、山下にきかれて、「うーん」と、美加子は、考えていたが、
「例えば、東京で、誰かを殺してしまったとかね」
「君は、穏やかじゃないことをいうんだねえ」
と、山下が、笑った。

「それも、奥さんを殺してしまった――」
美加子は、図にのって、いった。
山下は、小さく首を振って、
「家内は、三年前に、心不全で、病院で死んでいる」
「お子さんは、いないの？」
「幸か不幸か、子供は出来なかった」
「幸か不幸かって、どういう意味なの？」
「私には、子供を育てる自信がなかったからね。もし、子供が出来ていたら、きっと、犯罪者になってしまっていたと思う。だから、子供が出来なくて、良かったんだよ」
と、山下は、いった。
「山下さんて、案外、自信のない人なのね」
「ああ、自信がない人間かも知れないな」
山下は、素直に、いった。
「お父さんはね、山下さんが小説家だなんて、嘘だといってるわ。あのマンションに越して来てから、一度も、小説を書いてるのを見たことがないといってるわ」
と、美加子は、いった。山下が、怒るかなと思ったが、湖面に眼をやったまま、
「そうかね」

と、いっただけだった。

「本当は、どうなの？　小説を書いてるの？」

「ああ、書いてるよ。君のお父さんは、見たことがないといってるみたいだが、他人の眼の前で書くものじゃないからね」

「そりゃあ、そうよね。それで、どんな小説を書いてるの？」

と、美加子は、きいた。

山下は、黙って、煙草を取り出して、口にくわえ、両手で囲うようにして、火をつけた。

美加子は、そんな山下の動作を、じっと、見つめていた。彼が、そうしながら、彼女の質問に、どう答えようか、考えているように見えたからである。

「昔、諏訪湖の傍で生れた男がいた。金持ちでもないし、と、いって、貧乏でもない家に生れた。頭が良かったが、身体が弱く、よく、カゼをひいた。厳格な父は、彼の身体を鍛えようとして、まだ寒い季節に、彼を、諏訪湖に放り込み、泳がせた。おかげで、彼は、丈夫になったが、厳しい父に、反感を持つようになった。いや、それは、正確じゃない。感謝と、反感を同時にだ。彼は、その後、父の都合で、東京に移り、五十歳過ぎまで、東京で過ごすことになった」

山下は、ひとりごとのように、喋った。

「それ、山下さんのことね」

と、美加子は、いった。が、山下は、彼女の言葉が、聞こえなかったみたいに、
「厳格で、ひたすら、強くなれといい続けた父は、彼が三十二歳の時に亡くなったが、その後も、父は、彼を支配しつづけたといってもいい。彼は、感謝と反感を持ちながら、父の影響から、抜け出ることが、出来なかった。彼は、時々、父は、何かに似ていると思った。そうだ。諏訪湖に似ていると、気付いた。彼の知っている美しく、厳しい湖だ。夏は、子供たちが、歓声をあげて泳ぎ廻り、冬になると、凍結し、凍った湖面が、ぎしぎしときしむ湖だよ」
「――――」
今度は、美加子は、黙って、山下の話を聞くことにした。
山下は、彼女に聞かせるために話すというより、自分との会話のような話し方をしていた。
「彼は、四十何年かぶりに、諏訪へ帰った。諏訪湖を、見たくなった。湖の傍に住み、見つめていれば、父の呪縛から、解放されるかも知れない。新しい生き方が、出来るかも知れないと、思ったのだ――」
「つまり、山下さんは、自伝を書きたいのね？　そうなんでしょう？」
「さあ、どうかな」
「それ、いつ頃できるの？　私、読んでみたいから」

と、美加子は、いった。
「わからないね。二、三年かかるんじゃないかな。今の私には、他に、することがないから」
「来年の三月までに、書きあげて欲しいわ」
「どうして？」
「私が、大学を卒業するから。卒業したら、私は、東京に行くつもりだから、もう、山下さんには、会えなくなるわ」
と、美加子は、いった。
「松本の大学を卒業したら、諏訪に帰って来る気は、全然ないのかね？」
と、山下が、きいた。
美加子は、小さく肩をすくめて、
「今だって、ここの退屈さを持て余してるんだもの。絶対に、東京へ行くわ。そして、山下さんみたいに、何十年かたったら、また、諏訪へ戻ってくるかも知れないけど。だから、早く、書いて、私に見せて」
「期待にそえるかどうかわからんな」
「ね、東京では、何をやってたの？」
と、美加子は、きいた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong